

第2章

モールス電信機 誕生物語

情報通信の黎明期から先史以前の通信，そして静電気の発見によって，情報通信手段は画期的な発達を遂げていきます．そして，電池の発明を契機に動電気を情報通信伝達的手段とした各種情報通信システムが本格的に考案されるようになってきます．

本章では，これらの通信手段の発展を歴史的に振り返って，モールスによる印字式電信機の実用化，モールス・キー誕生までの歴史的経過などについて触れていきたいと思ひます．

2-1 情報通信の黎明

情報通信手段の進展

現代社会において情報通信は，それなくしては社会生活が成り立たないぐらいに重要な役割を担っています．その歴史は人類の歴史とともに古く，太古の昔には烽火や絵，^{ほうか}図2-1に示すようなパイプの音に意味を持たせ，意思を伝達する方法などが使われてきました．その後，現在の情報通信手段に至るまでさまざまな媒体を用いて情報伝達手段を発達させてきた長い歴史があります．すなわち，人類は他人と情報のやりとりを行わないと，社会生活を営むことができなかつたからです．

わが国では，江戸時代までは，日常の通信には飛駢，駢制(写真2-1)，伝馬，飛脚，使送，伝書鳩，手



図2-1 軍隊などでは早くから音声でメッセージを伝達する道具が使われていた

図は16世紀のスコットランドの軍隊で使用されていた音声でメッセージを伝える道具で，以後，バグパイプへ発展していく．かつて，各国の軍隊でも使用された伝令ラッパも，音で一定の指示を周知する目的で使用された



写真2-1 駢制のシンボル駢鈴

駢鈴は大化の駢制(646年)のときに定められたので，駢馬や飛脚の宿駢，各駢などで駢馬などを無料で使用できる証として朝廷から交付されたもの．わが国に現存するものは，島根県隠岐島の億岐家に伝承されている二個だけである

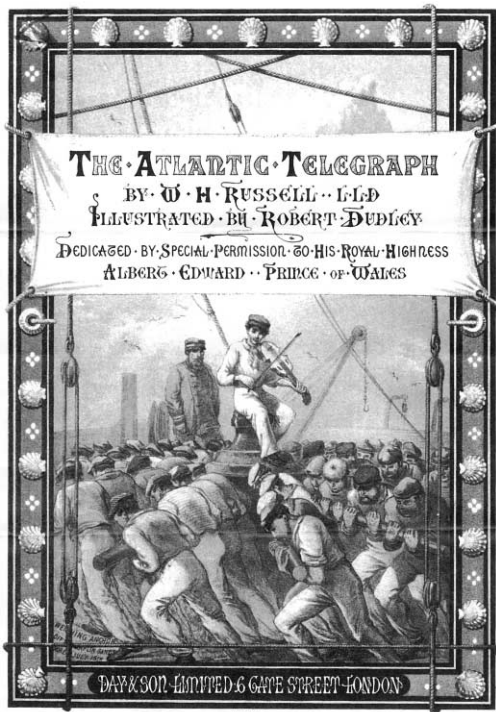


図2-2 「The Atlantic Telegraph WH.Russel 1865」の表紙に描かれているAtlantic Telegraph社の大西洋ケーブルの陸揚げ所におけるケーブル巻き上げ作業の様子(1854年)

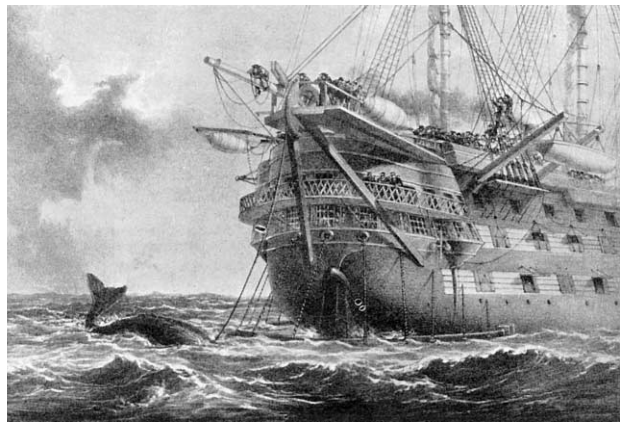


図2-3 英国 Atlantic Telegraph 社の大西洋海底ケーブル線敷設中の Agamemnon 号

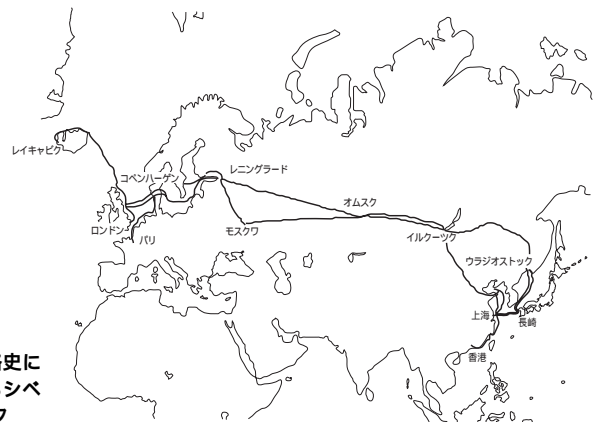


図2-4 大北電信会社百年史(1869～1969年)略史に示されている1907年頃の長崎・上海・海底線からシベリア経由でヨーロッパに至る長距離ネットワーク

旗信号といった手段が用いられていましたが、幕末に外国から渡来した電信機により、明治2年(1869年)には東京 - 横浜間で電信事業が開始され、さらに明治4年(1871年)には、デンマークの大北電信会社(GNT)による長崎 - 上海間の海底ケーブルなどによって、国際電報サービスが開始されました(図2-2, 図2-3)。そして、同社の電信ネットワークは図2-4に示すように拡大していき、以後、モールス通信が公衆通信サービスの中心的な役割を果たしていきます。

さらに、明治23年(1890年)には電話事業が、マルコーニによる大西洋横断通信実験からわずか2年後にあたる明治36年(1903年)に国産の三六式無線電信機が実用化され、日露戦争(1905)の日本海海戦で活躍しました。大正14年(1925年)にはラジオ放送が始まり、戦後は人工衛星をはじめとする著しい技術の革新により、情報通信分野の技術は飛躍的に発展していきました。「温故知新」という言葉がありますが、情報通信の歴史をたどることによって、モールス通信の新しい再発見があるかもしれません。